

## 資料

## 櫻井錠二の御進講「第三回汎太平洋学術会議に就て」\*

山中千尋\*\*

キーワード：汎太平洋学術会議、学術の国際化、櫻井錠二

## 1. はじめに

今日、論文数や被引用数の比較を伴う大学ランキングなど、知をめぐる世界的な競争が激しさを増している。一方で、研究活動は国際的に行われており、海外機関との研究交流、国際共同研究や国際誌での論文発表、オープンアクセス化など、世界との知の共創も進んでいる。

こうした学術の国際化はいつから始まったのだろうか。日本科学史学会編『日本科学技術史大系』等の通史において指摘されているように<sup>1)</sup>、明治以降、教育・学術・文化の国際交流が飛躍的に進んだことはよく知られている。このうち、筆者は、1926（大正15）年に東京で開催された「第三回汎太平洋学術会議」（The Third Pan-Pacific Science Congress: 以下、第3回会議またはPSC）と、同会議を主催した学術研究会議（National Research Council of Japan）の議長かつ準備委員長を務めた櫻井錠二（1858-1939：以下、櫻井）に注目している。PSCは、日本においては初めての大規模な国際会議であり、諸外国および国内から様々な分野の研究者600名以上が参加した。会期は10月30日から11月11日と長く、その前後（10月18日～25日と11月11日～15日）には、国内多方面へのエクスカージョンが付加されていた。

同会議の詳細についての検討は他稿で行うこととし、本稿では、櫻井が、当時の摂政宮（のちの昭和天皇）に行った御進講を紹介したい。この資料は石川県立歴史博物館に保管されている。櫻井のご家族が、本人の櫻井の生誕地である石川県の同館に寄贈したものであり、同館は、このほかにも多くの櫻井関係資料を所蔵している。

筆者は2015年の科学史学会年会で、本稿に関連する発表を行った。その後、同館のご担当者にご快諾をいただき、本資料の内容を検証する機会を得た。この御進講は管見の限り出版されておらず、仮に何らかの形で出版されていたとしても筆者とは解釈が異なるであろうから、この機会に紹介する価値があると考えている。

御進講の実施は1926（大正15）年11月24日であるが、添付された文書の日付を見ると、侍従長からの依頼状が1927（昭和2）年7月30日、櫻井からの送り状下書きが同年8月5日、タイプ済の送り状が同年8月23日となっている。つまり、御進講の行われた日と原稿が提出された日では、9か月程度の開きがある。

侍従長からの依頼文では「貴殿御進講ノ草案御保存モ有ノ候ハ、御差出相成候様致度」と御進講

\* 受理日：2020年9月11日

\*\* 横浜国立大学 E-mail: chihirocean@gmail.com

の草稿が保存されていれば提出してほしい旨を述べており、追伸として「追テ訂正増補ノ箇所有之候モ差支無之為念申添候」と、修正したり追記したりしても構わないと述べている。それに対して、櫻井は「右草案ハ保存不致候」と送付状の下書きに記しており、御進講の原稿は保存していないが早速書きました、としている。実際の送付状では、不保存の件には触れておらず、「(同御進講の)草案乍延引茲に同封差出申候間御査収可被下候」と、単に原稿を送付することのみが記されている。御進講草稿は、文部省のレター用紙に縦書きでタイピングされているが、所々に櫻井の手書き文字で訂正がある。

これらのことと、PSC 開催後まもない時期の御進講であったことから、実施当日には、とくにまとまった原稿を用意していなかった可能性があり、本資料は、御進講録編纂のために、櫻井側が後日若干の修正を加えて作成したものではないかと推定できる。なお、御進講録への収載については、宮内庁書陵部では確認できなかった。

御進講草稿は 20 頁と長文であるため、以下の翻刻では、各パートに見出しを付した。また、使用目的は明らかではないが、英文の簡約版 14 頁が、同じくタイプ原稿で実在するため、文末で紹介する。<sup>2)</sup>

## 2. 御進講<sup>3)</sup>

### 〔1〕 第三回汎太平洋学術会議に就て

大正十五年十一月二十四日御進講

学術研究会議会長 櫻井 錠二

#### ○汎太平洋学術会議の目的と背景

学術研究会議の主催の下に、本年十月三十日より十一月十一日に至る十二日間<sup>4)</sup>、東京に於て開かれましたる第三回汎太平洋学術会議の経過及結果に就て御話申上げ<sup>5)</sup> ます前に、汎太平洋学術会議なるものの目的及来歴並に今回の会議に関する準備に就きまして一通り申上くることに致したいと存じます。

太平洋は、赤道上に於きまして、西はシンガポールより東は南米のイクワドールに至る一万哩<sup>まいる</sup>以上の幅を有し、南北の距離は、ベーリング海峡の経度上に於きまして、北緯六十六度より南緯六十六度に至る約八千哩でありまして、其の面積は地球上の陸地全部の面積よりも更に大いのであります。而して太平洋には、濠州の如き其の面積北米合衆国の面積と殆ど相同しき大なる島国を初と致しまして、大〔2〕小の島嶼<sup>とうしょ</sup><sup>6)</sup> が無数にありますので、其の人口は太平洋沿岸諸国の人口と合せて地球上の全人口の半以上に達するのであります。

太平洋地域は斯の如き広大なるものであり、又世界文化の中心か、西へ西へと、昔は地中海より太西洋<sup>7)</sup> に移り今は正しく太西洋<sup>8)</sup> より太平洋に移りつゝありますので、此の地域は極めて枢要の地位を占むるものでありますにも拘らず、其の余りに広大なるか為、之に関する吾人の知識は未だ甚た不完全なるものかありまして、単に人智開発の点より之を考へましても、此の不完全なる状態をして其の儘推移せしむることは到底之を許すこと能はざる所でありますし、又人類の安寧福祉の促進上より之を見ますときは、一日も忽<sup>ゆるがせ</sup><sup>9)</sup> にすへからざる所のものであります。而も一国の独力を以て、又は一専門学の方面のみより、此の広大なる地域の多種多様な問題を研究致しましても、到底見るべき結果を取むること能はざるは明なる所であ

りますので、太平洋地域にある諸国其の他太平洋に利害関係を有する諸国が一団となり、且各専門の自然科学者を網羅して、共同的に此の地域の自然現象に関する諸問題を攻究し、以て人智の増進に貢献し、人類の繁榮に寄与し、併せて是等諸国の国〔3〕交親善を促進せんことを期する為に設立せられたるものが<sup>10)</sup>、即<sup>11)</sup>ち汎太平洋学術会議であるのであります。

尤も、最初より此の目的の輪郭<sup>12)</sup>が斯く判然と相成つて居た訳ではないのであります。第一回よりも第二回、第二回よりも第三回、と申す風に会議を重ねる毎に追々と明確に相成つたる次第でありまして、今回の第三回会議に至りまして、独り目的のみならず総ての事が確定せられたのであります。

### ○第1回会議の状況

第一回汎太平洋学術会議は米国側の主催に依り大正九年にハワイに於て開かれまして、本邦よりは森房吉、山崎直方、岸上鎌吉、柴田桂太の四名か之に参会致しましたか、何れも政府又は大学其の他の学術機関の代表ではなく、単に個人の資格で出席致したのであります。他の諸国から参会致しました者も矢張同様でありまして、第一回会議は寧ろ有志者の瀨踏の会合とも申すべき性質のものであつたのであります。併しなから、太平洋に関する学術問題の共同研究は何れの国の学者も齊<sup>13)</sup>しく其の必要を認めて居たことでもありますので、同会議に於きましては多くの重要な問題が討議せられ極めて有益なる結果が収められたのであります。〔4〕而して其の結果に鑑みて、同様の会議を又々開催すべきことを参会者一同申合せ、且次回開催地を濠州又は新西蘭とし、其の又次の開催地を日本としたき希望が参会者多数の間にあつたのであります。

### ○第2回会議の状況

第二回汎太平洋会議は濠州学術研究会議主催の下に大正一二年同国メルボーン及シッド二両市に於て開催せられまして、森房吉、山崎直方、池野成一郎、新城新蔵、仁田直、戸田正三、大島正満、近藤萬太郎、小倉信吉並に私の十名か我学術研究会議又は台湾総督府の代表として之に参会致したのであります。

是より先、本邦に於て汎太平洋学術会議を開催致しまする<sup>14)</sup>ことは、独りハワイに於ける第一回会議の希望でありますのみならず、学術発達及国交親善の両方面より見まして本邦の爲極めて有益なるものかあります<sup>15)</sup>ので、我学術研究会議は第三回会議を本邦に於て開催するの議を定め、之に要する経費の補助に關し予め政府の了解を得まして私共一同濠州に出張致したのであります。

濠州に於ける第二回会議の海外参会者は、大部分政府又は学術機関の代表であり〔5〕其の数も又提出せられたる論文の数も第一回会議に比し余程多数でありまして、総ての点に於きまして第二回会議は第一回会議よりも遙に盛会であつたのであります。而して其の最終の總會に於て可決せられたる決議事項の中で第三回会議に直接関係あるものを挙げますれば次の二件であります。

其の一は、次回即ち第三回会議を一千九百二十六年日本に於て開催する件でありまして、本邦代表の提議に係り全会一致を以て之を可決しましたる後、会長其の他の役員の選定と共に次回会議に関する準備其の他の事務は挙げて之を我学術研究会議に一任すること、相成つたのであります。

其の二は、永久機関創立の件でありまして、汎太平洋学術会議は暫定的のものであつたのであります。第一回第二回両度の会議の成績に鑑み、其の極めて有益なるものであることか十分に認められましたるに依り、之を永久的機関の組織に変更し其の目的・研究問題の範囲等を規定すへき規程及会則を制定する為一の国際創立委員を設け、委員に於て作成したる規程及会則案は次回会議の総会に之を提出することゝし致し、而して次回会議の主催国即ち本邦側の委員か創立委員長とし〔6〕て規程及会則案を起草することになつたのであります。

右第二回会議の最終の総会は大正十二年九月三日に開かれたのであります。関東大震災の悲報は当日の朝刊諸新聞に依て濠州に伝えられたのでありまして、司会者より同情に堪へざる旨の挨拶がありましたか、会衆も亦同情に堪へざるものゝ如く、本邦側代表の次回会議招請の提議に対し只黙して賛意を表するに止まりましたるは洵に遺憾とせし所でありますか、何はさて三年後の第三回会議を果して本邦に於て開催することを得る哉否の点か、最も懸念に堪へざる所であつたのであります。依て帰朝後直に文部大臣と内閣総理大臣とに面会致しまして重ねて政府の了解を求め、両大臣の懇<sup>16)</sup>切なる言葉に力を得まして弥々第三回会議の準備に着手することに致したる次第であります。

### ○第3回会議の準備

汎太平洋学術会議の如き、其の使命の重大なる又其の研究範囲の広汎なる国際学術会議を本邦に於て開催致しますことは、今回か初てあります故に、準備に着手致しまするに当つては、万事に最大の注意を払ふことの必要かありますので、約三年に渉り関係者一同最善の努力を致しまして、些も蹉跌<sup>17)</sup>なきことを期し、且學術〔7〕上に於きましても又国交上に於きましても、十二分の効果を収めんことを念したる次第であります。而して此の効果を収むるには、会議従來の仕組を変更して共同一致の精神を遺憾なく發揮せしむへき方針を取ることに必要あるを痛切に感しましたので、此の方針を以て総ての施設を為したのであります。最も主要なるものは次の二点であります。

第一、従來は会議全体を多数の小分科会に分ち、室を異にして少数の同一専門の学者か会合することを本体とする仕組であつたのであります。斯くては折角多数に参会したる学者か互に相識することの<sup>18)</sup>機会も甚た乏しい訳でありますのみならず、最も大切なる共同研究の少くとも一部を無視することに相成るのでありまして、洵に遺憾に存したる所であります。元來今日の自然科学の区分 - 例へば物理学、化学、地質学、動物学、植物学などの部門を設けますのは、単に便宜上のことのみでありまして、實際は分つへからざる程の密接なる関係連絡の相互的に其の間に存するものか少くないのであります。又自然現象も比較的簡単に見へましても、其の実多くは複雑なものでありまして、多方面より之を研究する必要かあ〔8〕りますか故に、関係の最も密接なる数科の専門家か一同に相会し、或る問題に就ては各自の専門的立場より夫々意見を発表し以て共同研究の実を挙げ得る様会議を仕組むことか必要であるのであります。即ち従來十数個の分科会を設くることを会議の本体と致しましたるを改めて、僅に二個の部会を設くることを本体と致したのでありまして、其の一は物理的諸科学部、其の二は生物的諸科学部であります。斯くして天文、気象、物理、化学、地質、地理、鉱物、地震、火山等に関する研究論文は何れも物理的諸科学の部会に於て発表せられ、動物、植物、遺伝、農業畜産、水産、人類、医学、衛生等に関する研究論文は何れも生物学諸科学の部会に於て発表せらるゝことに致したのであります。尚海洋学の如き範囲の極めて広汎なる学科に関する問題

に就きましては、両部の連合会を催し、物理的諸科学の専門家も生物学諸科の専門家も共に之に参加することに致したのであります、併しなから分科会も全然之を廢したる訳ではないのでありまして、問題範囲の小さく限定せられたる論文は分科会を設けて之を發表することに致したのであります。

第二、共同一致の精神を發揮すへき施設として更に、會議に提出すへき論文の〔9〕範囲に或る程度の制限を加ふること必要なりと考へたのであります。即ち従来は各自勝手に事項に就て研究したる結果を持寄つて之を發表するを常と致したのでありますか、是亦共同研究の精神に副ふ所以ではないのでありますか故に、今回は太平洋に関する學術問題にして最も重要なりと考へらるゝもの幾件かを予め選定致しまして、其の範囲の問題に就て各国各専門の学者か論文を寄与することゝ致したのであります。

斯くて種々の準備も着々進行致し、又總裁には閑院宮<sup>ことひと</sup>載仁親王殿下を推戴致しますことゝ相成り、名誉会長、名誉副会長其の他役員等も夫々定まりましたるに依り、大正十四年四月會議に関する英文第一報を印刷致し關係諸国並其の属領の政府及諸種の學術機関に右要報を添へて招請状を發送致し、更に見学旅行の日程其の他の準備全く成るに及びまして、本年七月英文第二要報を印刷致して前と同一の向々へ之を發送致したのであります。

○参加状況

右招請に依りて代表を出席せしめましたる海外諸国又は其の属領の政府の数は二十一、學術機関の数は百六であります、又代表其の他の参会者の数は百九十四で〔10〕ありまして、其の内訳は次表の通りであります。

| 国名又は属領名              | 政府 | 學術機関 | 参会者 |
|----------------------|----|------|-----|
| 北米合衆国 <sup>19)</sup> | —  | 五〇   | 五六  |
| 濠州                   | —  | 二    | 三二  |
| カナダ                  | —  | 六    | 八   |
| 智利                   | —  |      | 一   |
| 支那                   | 二  | 一四   | 一八  |
| 仏国                   | —  | 四    | 八   |
| 英国                   | —  | 一    | 五   |
| ハワイ                  | —  | 三    | 一二  |
| 香港                   | —  |      | (一) |
| 印度支那                 | —  |      | (一) |
| マカオ                  | —  |      | 二   |

〔11〕

|                                |   |   |     |
|--------------------------------|---|---|-----|
| 和蘭                             | — | 一 | 三   |
| 蘭領印度                           | — | 六 | 一四  |
| 新カレドニア                         | — |   | (一) |
| 新西蘭                            | — | 四 | 七   |
| ペルー                            | — |   | 一   |
| 比島                             | — | 四 | 一一  |
| 海峡 <sup>20)</sup> 植民地<br>マレー連邦 | 二 | 一 | 五   |
| タヒチ                            | — |   | (一) |

|          |  |    |     |     |
|----------|--|----|-----|-----|
| ソヴィエツト連邦 |  |    | 一〇  | 一〇  |
| 瑞典       |  |    |     | 一   |
| 計        |  | 二一 | 一〇六 | 一九四 |

右の内瑞典は太平洋に何等関係なきものでありますか、同国の植物学者にして太〔12〕平洋地方の植物研究家か一人参会致したのであります。又香港はカナダの代表、印度支那、新カレドニア、タヒチは仏国の代表か兼て之を代表致したのであります。

第一回会議に於きましては、参加したる海外諸国又は属領の数は僅に六、而も政府若くは學術機関の代表と申すものは一人もなく、而して有志者として右六ヶ国より参会致したる学者の数は約二十名に過ぎませず、又第二回会議に於きましては、代表を出席せしめたる諸国又は属領の政府の数は一四、同学術機関の数は六十七、海外参会者は約百名であつたのであります。今回の会議は第二回会議に比しましても、数に於て既に遙に優勢であるのであります。而して各学科を通しまして学識人格兼備の立派な学者か海外諸国より多数に参会致しましたることは大に私共の意を強ふしたる所であります。

尚国内委員に就きましては其の資格に相当制限を設けたのでありますか、夫れても四百名以上と相成り、海外参会者と合せて総数六百を越ゆるに至りました。

### ○プログラム内容

開会式は十月三十日東京帝国大学の講堂に於て行はれ、総裁載仁親王殿下親し〔13〕く御台臨の上令旨を賜り、次に名誉会長内閣総理大臣の演説、次に会長の演説、次に米国、英国、智利、支那、仏国、和蘭、ペルー、マカオ、ソヴィエツト連邦各代表の演説かありまして式を了りましたか、当日の莊嚴にして光輝ある景況は恰も会議の成功か既に半以上収められたるかの如き感を与へたのであります。

夫れより以後は、土曜日曜を除くの外、十一月十一日に至る迄毎日午前午後共貴族院及衆議院の会議室を会場と致し、部会、連合部会、分科会を開きまして論文の発表及之に関する意見の交換を行ひましたか、其の間に内外の会員互に相識り互に相親むことを得まして、会議は極めて円満に極めて愉快地に、而も學術上多大の成績を挙げつゝ進行致したのであります。斯くて、内外の会員より提出せられたる論文の総数は四百数十篇に上つて居りますか、一問題に就て比較的最も多数を占め而も最も重要視せられたるものは、恐くは海洋学に関する論文であります。而して海洋学に関しましては連合部会に於きまして地理学、地質学、物理学、動物学、植物学、水産学等各方面の学者か論文を提出し意見の交換を行ひましたるに止らず、国際常任委員会を組織し、物理及化学的の海洋学、基礎生物学的の海洋学、魚業〔14〕の三方面より各国共同的に常時之か研究に従事することゝ相成つたる次第であります。

尚会場に於きましては、参考資料陳列場を設けまして、本邦の外、ソヴィエツト連邦、蘭領印度、仏領印度支那等の出品に係る地質、地理、地震、火山等に関する研究資料を多数に陳列致して参考に供し、更に夕刻の時間を利用致し、大学の講堂及商工奨励館に於きまして、公衆の為に海外参会者中著名の学者の講演会を開くこと六回であります、共に有益なる施設であつたのであります。

### ○太平洋学術協会の創立決定

最終の総会は十一月十一日午後衆議院の議場に於て開かれましたか、太平洋学術問題の共同

研究に関する幾多重要な決議事項の外、蘭領印度政府の招請に依りまして本年より三年後に次回会議をジャワ<sup>6</sup>に於て開催する件を可決致し、又先刻申上げましたる永久機関に関する国際委員の提出に係る規程及会則案に一、二の小修正を加へて之を可決致しましたる後、皇室に対し奉り又帝国政府、帝国議會、帝国大学其他種々の學術機関、府縣市等各方面に対し感謝の決議を為して盛会裡に閉会を告げたる次第であります。

〔15〕 尚右總會に於て可決確定致しましたる規程及会則に就いて一言申上げまするならば、永久機関と致しましては「太平洋學術協會」なるものを創立致しまして、将来は此の機関か其の事業を行ふ為に国際會議を開催することの大体主義を取つたのであります。而して国際會議を組織するに当りましては、共同一致の精神を十分に發揮すべく部会及連合部会に重きを置くべきこと、特定問題に就て論文寄与の方法を採用すべきこと等も制定致したのであります。即ち本邦は右規程及会則の立案者でありますと共に今回の會議を右規程及会則の精神に基いて組織致したる訳でありますので、而も此の會議か予期以上の成績を挙げ得ましたることは関係者一同の深く満足とする所であります。

### ○エクスカージョンの充実

以上は今回の国際會議に就きまして其の骨格とも申すべき部分を一通り申上げましたる訳でありますか、尚これより其の筋肉血液とも考へられ得る所のものに就きまして少しく申上げたいと存します。夫れは、一方に於きましては見学旅行、他の一方に於きましては歓迎接待に関する事項であります。

見学旅行は今回の如き學術上の国際會議に伴ふて常に行はるゝの所のものであり〔16〕 ますか、併しなから今回の如く其の区域の広汎なる、又其の用意の周到なるものは、恐くは何れの国に於きましても未だ曾て其の例を見ざる所であろうと存します。即ち北は北海道白老のアイヌ部落及幾春別の化石産地見学より南は桜島の火山見学に至ります迄、全国に渉り約二十組の見学旅行を行つたのでありまして、又其の準備と致しましては約二ヶ年に渉りまして、専門の学者を各旅行地に派遣致し詳細なる其の調査の結果を纏めまして各見学旅行に関する英文案内書を編纂致したのであります。更に、汽車、汽船、自動車、旅宿等に就きましては出来得る限り海外参会者に便宜と好感とを与える様予め十分の手配を致し万遺漏なきを期したる次第であります。

斯くして、会期前即ち十月十八日より同二十五日に至る八日間に北海道の見学旅行を行ひ、同二十六日より二十九日に至る四日間に日光及箱根の見学旅行を行ひ、又会期中の土曜日曜日を利用致しまして足尾、日立、原の町及松島、富士山麓<sup>21)</sup> 湖水地方鎌倉及江の島、木下、加曾利、秩父、吉見、三崎の十組の短期見学旅行を行ふたのであります。更に会期終末の十一月十一日の夜汽車にて一同京都〔17〕 に至りまして、同十二日より十五日に至る四日間に京都、奈良、大阪、神戸を見学致したる後、十六日宮島に至り、夫れより三組に分れまして甲組は別府及温泉嶽を見学致し、乙組は四国に渡りまして、別子銅山及屋島を見学致し、丙組は遠く鹿児島迄参りまして桜島を見学致し歸途更に阿蘇山を見学致し、十一月十九日を以て全部の見学旅行を了つたのであります。

以上の見学旅行か學術的甚だ有益でありましたことは申上る迄もない所でありますか、又今回の會議の成功に大なる関係を有し殊に国交親善に貢献する所か少くなかつたこと、存します。何故であるかと申しますに、一面に於きましては松島、日光、箱根、京都、奈良、宮島等

の或は天然の風致に富み、或は古代の美術に豊なるは、必らず日本に対する海外参会者の愛好心を深からしむる所かあつたてありませうし、更に一面に於きましては普通観光旅客の足跡を止めざる国内深き所にまで分け入り<sup>22)</sup>まして、有りの儘なる淳<sup>23)</sup>朴なる国民の生活状態と津々浦々に至る迄教育上の施設ある状況とを親しく観察して、日本なる国をよく了解するに至つたてであろうと存します、而してこの愛好心と了解とは実に国交親善の基礎を成す所〔18〕の大切なものであるからてあります。実際、今回の見学旅行に於きまして海外参会者を最も驚かし最も喜はしめたる所のものか、如何なる辺鄙<sup>へんび</sup>に至りましても男女の小学生徒に遇はさることなく又遇へは必らず彼等か愛らしき笑顔を以て会釈せさることなき点てありますことは、参会者より直接に屢々<sup>しばしば</sup>承つた所てあります。

### ○レセプションの充実

歓迎接待に就きまして、今回の如き<sup>24)</sup>手厚きものは殆ど其の類例なき所てであると存します。会期中は勿論てありますか、会期前後の見学旅行に関しましても、海外参会者は全部主催者側の賓客として之を取扱ひしましたるのみならず、畏くも皇室の優渥なる思召に依り霞ヶ関離宮に召されて御茶菓を賜り、更に赤坂離宮に於ける観菊御宴に召されて無上の光榮に浴し、又総裁載仁親王殿下御主催の新宿御苑<sup>25)</sup>に於ける園遊会に召され、名誉会長内閣総理大臣の晩餐会、名誉副会長外務大臣の園遊会、其の他官民各方面<sup>26)</sup>の晩餐会、午餐会、園遊会、茶会、鴨猟、観能、観劇等の招待を受けたることありまして、皇室の有り難き御優遇<sup>27)</sup>に対し奉り感激の至に堪へざる所かありましたると共に、各方面の好意接待に対し殆ど感謝の言葉を知らざるかの如くに喜悅し満足したる所てありまして、是亦国交親善に多大の〔19〕貢献を為したることは申す迄もない所てあります。而も又見学旅行先の各地に於きましても官民の歓迎を受けましたることは一方ならざる所てありまして、地方に依りましては其の地の産物を土産として海外参会者に贈与致したる所も少くない様てあります。

### ○第3回会議の成果

今回の会議の結果に就きまして更に一言申上げますならば、太平洋学術問題の共同研究か、之か為に著しく促進せらるべきは毫も疑を容れざる所てあります。又本邦の学界と海外諸国の学界との関係か大に其の親密の度を加へ一層<sup>いんきん</sup>懇懇と相成り申すべきは、是亦堅く信して疑はざる所てありまして、共に慶賀に堪へざる次第てあります。

更に、今回の会議か我学界に大なる刺激を与へましたることは明てありまして、之か為に本邦に於ける学術研究か一般に大に促進せらるべきを信する次第てあります。又同会議か最近五六十年間に於ける本邦学術の進歩発達を海外の学界に紹介するには無上の好機会であつたのでありまして、本邦学者の研究に係る論文にして同会議に提出せられたるものか極めて多数てありましたこと、殊に其の中に〔20〕貴重なものか少くありませなかつたこと、又大学其の他各種の研究機関に於て重要な学術研究か盛に行はれつゝありますこと、研究設備の優秀なること等を親しく観察致しましたる海外参会者にして、僅々五六十年間に於ける本邦学術の此の迅速なる進歩発達に驚歎せざるものは殆ど一人もなかつた位てあります。

而して、此の迅速なる本邦学術の進歩発達と、本邦か今回の国際会議を主催致しまして欧米諸国に於きましても多く其の例を見ざる程の成功を遂げ得ましたるのみならず、太平洋学術協会の規程及会則の立案者として之か創立に貢献致しましたることゝは、共に本邦学界か世に重

きを成す所以てなければならぬと信する次第であります。

以上に示した御進講の概要は、まず 1-2 頁では、汎太平洋学術会議の目的と開始の背景を説明している。目的として、太平洋地域にある諸国が、自然科学系の研究を連携して行い、国家間の親善を図ることであるとしている。

3-5 頁では、第 1 回会議と第 2 回会議の状況がまとめられている。いずれも日本からの参加者があったこと、第 1 回は有志会議の様相であったのに第 2 回は公的な様相を呈し大規模化していたこと、第 2 回への出張前に第 3 回会議の開催費用について政府に合意を取りつけたこと等が説明されている。

5-6 頁では、第 2 回における決議事項として、(決議当時は震災直後であったが) 第 3 回会議を日本で開催すること、汎太平洋学術会議を永久機関へと発展させること、が示されている。

6-9 頁では、第 3 回会議の準備の様子が述べられており、例えば、第 2 回会議の豪州出張から帰国後、再度政府を訪ねて第 3 回会議開催の了承を取り付けたこと、第 3 回会議ではより成果を挙げるため、共同研究が可能となるような分科会の大括り化を行い、発表論文の査読を導入したこと、プログラムやエクスクーシジョンの調整など、3 年間にわたる準備状況が挙げられている。ただし、9 頁「種々の準備も着々進行し」については、具体的な人物や組織の名前は挙げていない。<sup>28)</sup>

10 頁以降は、第 3 回会議の実際の開催状況である。海外からは、21 か国・地域、106 機関、のべ 194 人 (重複あり) が参加しており、第 1 回、第 2 回会議を上回ったとしている。表には、国名・機関数・参加者の人数が示されている。米国からの人数が最も多く、次に豪州、3 番目に中国からの人数が多いことがわかる。一方、国内からは、参加資格を厳しくしたが、400 名以上が参加したとする。

13-14 頁では、プログラム内容についてであり、論文発表・意見交換のほか、共同研究のための委員会の組織や、研究資料の展示、公開講演会を行ったことがわかる。

15 頁では、第 3 回会議の最終日に行われた総会において、「太平洋学術協会」(Pacific Science Association) の創立が決まったとしている。

16-17 頁では、エクスクーシジョン (見学旅行) について説明されている。<sup>29)</sup> 専門家による入念な準備と移動手段や宿泊先の万全な手配を経て、会期前後の期間と会期中の週末を利用して、多方面への見学ツアーが実施されたことがわかる。これにより現地の子どもたちとのふれあいを含め、日本の現状をよく知らせることができ、国交親善に役立ったとしている。

18 頁では、皇室や総理大臣主催のレセプションや文化イベント等について説明され、これも国交親善に役立ったとしている。櫻井が、学術的な内容を「骨格」と表現したのに対し、見学旅行や接待を「筋肉血液」と並立させている表現から、主催者側として、これらの企画を重要視していたことを示すものである。

19-20 頁では、同会議の成果として、共同研究の促進、海外学界との関係構築、日本学界への刺激、日本の研究力の発信効果、太平洋学術協会創立への貢献を挙げている。

以上から、日本側が第 3 回会議をホストするにあたり、学術上のみならず、国交上の効果を必須としていたことや、日本についての海外へのアピールを意図していたことが読み取れる。

### 3. 御進講に見る国際化マネジメント

御進講に表れているように、櫻井は、日本の学術基盤形成を担っていた。これに関して、筆者は、

拙稿(2012;2016)<sup>30)</sup>で櫻井の生涯に学術振興という大きな柱があること、日本学術振興会の設立を導いたことを論じた。PSCをホストした学術研究会議は、もともと1919年に各国での設置が決まり、そこでも櫻井は設置に関する幹事であった。<sup>31)</sup>

PSC開催直前に出版された「本邦科学の国際化」という本人の論文では、「科学的業績の大部分、否殆んどその全部が世界に通用せざる邦語を以て書かれるが為めに、実際に於て知識の交換が行はれて居らぬのである。」と述べ英語使用を推奨するとともに、「今日の状態は到底日本の孤立を許さない」などとして、研究者の国際化の必要性を強く主張した。<sup>32)</sup> PSCのことは、本人の回顧録『思出の数数』の中でも本会議のことを大きく扱っており、「自分は一意専心学術研究会議の創設と国際学術協力機構の充実に邁進したのである」と学術の国際化に関して力を注いだことを記述している。<sup>33)</sup>

研究マネジメントの視点では、第3回汎太平洋学術会議の開催は、日本と日本の学術の国際化を企図していた、と言えるのではないだろうか。

#### 謝辞

貴重な資料をご提供いただきました石川県立歴史博物館に感謝申し上げます。

参考： 英文簡約版 御進講<sup>34)</sup>

[1]

THIRD PAN-PACIFIC SCIENCE CONGRESS.  
A lecture delivered before  
HIS IMPERIAL HIGHNESS PRINCE REGENT  
by  
Joji Sakurai, President of the National Research Council  
of Japan and President of the Congress  
on  
24th November 1926

(A<sup>35)</sup> n abridged Translation)

Before speaking of the main features of the Third Pan-Pacific Science Congress, which was held in Tokyo from 30th October to 11th November, 1926, under the auspices of the National Research Council of Japan, I beg to be permitted to dwell briefly upon the objects with which Pan-Pacific Science Congress have been originated, the steps which led to holding the Third Congresses in Japan, and the policy of organisation of that Congress.

The Pacific Ocean, extending from Singapore in the west to Quito<sup>36)</sup> in the east, has a width of more than 10,000 miles along the equator, and its north-south extent from the arctic circle<sup>37)</sup> to the antarctic circle<sup>38)</sup> through the Behring Straits is about 8,000 miles, the area occupied by this vast expanse of water being greater than the total land area of the globe. The

population of the Pacific region, including that of the countries bordering on the Pacific, is greater than half the total population of the entire globe. [2] Moreover, the Pacific is getting more and more important commercially, culturally, and politically, and the center of human activities, which in olden times was the Mediterraneanian<sup>39)</sup>, was shifted on westward to the Atlantic and is now being shifted further westward to the Pacific. And, in spite of its increasing importance, our knowledge of the Pacific is extremely meagre, because of its vastness and comparative newness of its discovery.

It is evident that even merely from the stand-point of expanding the bound of human knowledge this state of things cannot be allowed to pass<sup>40)</sup>, and when we remember that the promotion of the happiness and welfare of the peoples inhabiting the Pacific region depends upon the exact knowledge of the natural phenomena presenting themselves therein and the proper application of such knowledge, the study of these phenomena<sup>41)</sup> becomes a question of utmost importance and urgency. The Pacific region is, however, so vast, and the problems to be studied are so manifold and so complicated that it is perfectly futile for any one nation or any one group of scientists to undertake this study profitably. It is only by<sup>42)</sup> a harmonious cooperation of all the countries and institutions interested that success<sup>43)</sup> may reasonably be expected to be achieved. Such cooperation having a common object in view cannot, moreover, fail to promote goodwill and friendly relations among the peoples of the participating countries. It was with the object of undertaking this cooperative work that Pan-Pacific Science Congress was originally organised.

The First Congress was held in Honolulu, in 1920, by the invita-[3]tion of Pan-Pacific Union, its scientific meetings being, however, conducted in the hands of the American National Research Council. That Congress was of the nature of a preliminary conference, and four Japanese scientists— K. Kishinouye, F. Omori, K. Shibata and N. Yamasaki — participated in it. The attendance was not particularly large, the total number of non-American scientists present being only about 20; moreover, those who attended the Congress did so in the capacity of individuals, and not as delegates of either governments or scientific institutions. The success achieved by the Congress was, however, so undeniably great that it was unanimously resolved to hold such Congresses from time to time, and it was agreed that either Australia or New Zealand be the country in which next Congress will<sup>44)</sup> meet. There was even then a strong desire among all the scientists present that the Congress may meet for the third time in Japan.

The Second Pan-Pacific Science Congress, which was organised with the double object of promoting cooperative scientific study of Pacific problems and of promoting goodwill and friendly relations among the various countries interested, was held in 1923, in Melbourne and Sydney under the auspices of the Australian National Research Council. On this occasion, Japan was represented by ten scientists, viz.<sup>45)</sup>, S. Ikeno, M. Kondo, I. Nitta, S. Ogura, F. Omori, M. Oshima, S. Shinjo, S. Toda, N. Yamasaki and myself, and prior to their departure for Australia our National Research Council, supported by the Government, decided to invite the Third Congress to [4] meet in Tokyo.

The Australian Congress was, in every respect, on a larger<sup>46)</sup> scale, more truly

international, and achieved an even greater success than the Hawaiian Congress, so much so that at its last General Meeting it was unanimously resolved to establish a permanent organisation for the cooperative scientific study of Pacific problems. With this in view, it was further resolved that an International Organisation Committee consisting of a member from each of the countries represented be formed and that the Committee be asked to prepare a draft Constitution and By-Laws for the permanent organisation and present its recommendations at the next Congress, the member representing the country in which the next Congress will be held acting as Chairman<sup>47)</sup> of the Committee.

The invitation to hold the next meeting of the Congress in Tokyo, in 1926, was extended by the Japanese delegation at the same General Meeting and was unanimously accepted, it being resolved, also unanimously, that our National Research Council be invited to appoint the President and other Executive Officers of the Third Congress and that all the executive duties in connection with that Congress be entrusted to it. It was on 3rd September, 1923, that these Resolutions were adopted, and by a singular coincidence it was also on this very same day that the news of the great earthquake disaster at home was spread throughout Australia. The question whether it would be possible to hold the next Congress in Tokyo in there years' time at once became one of the gravest questions<sup>48)</sup> for the [5] Japanese delegation. Accordingly, immediately on arriving home I had interviews with the Minister for Education and the Prime Minister, and encouraged by their sympathetic and reassuring words we at once started the work of organisation of the Third Congress.

For the first time in the history of Japan, an international meeting of such importance and significance as Pan-Pacific Science Congress was to be held, and it was evident that in working out its organisation minutest details had to be thought out and most careful consideration had to be given them, if the Congress was to achieve a success. But the most important thing of all was to realise the solidarity of feeling and action, and with this in view we adopted a policy of organisation which differed from that of the previous<sup>49)</sup> Congresses mainly in the following two points:—

- (1) Hitherto the Congress divided itself up into a large number of Sections, each Section consisting of a comparatively small number of scientists of one and the same speciality<sup>50)</sup>. Such procedure is, however, not exactly conducive to the spirit of cooperation in a wider and truer sense, most of the more important scientific problems of the Pacific necessitating for their study and solution the cooperation not of one particular group of specialists but of several groups. For the Third Congress, therefore, provision was made for Divisions and for two Divisions only, each Division comprising a large number of allied branches of science, instead of providing a Section for each branch or sub-branch of science. These were the Division of Physical Sciences and the Division of [6] Biological Sciences, papers bearing upon Astronomy, Chemistry, Geography, Geology, Meteorology, Physics, Seismology, Volcanology and other allied subjects being read and discussed at Physical Divisional Meetings, and these bearing upon Agriculture, Anthropology, Botany, Ethnology, Fishery, Hygiene, Medicine, Zoology and other allied subjects being read and

discussed at Biological Divisional Meetings. For papers of a wider scope covering both Divisions, such as those on Oceanology, provision was made for Joint Divisional Meetings, and Divisional and Joint Divisional Meetings were to constitute the most important scientific meetings of the Third Congress. Provision was also made for Sectional Meetings, but in a secondary way, that is, these Meetings<sup>51)</sup>, were to be held to deal with papers of a limited scope, or those which, for want of time, could not be presented at one of the Divisional Meetings.

- (2) In order to realise solidarity of feeling and action and promote the spirit of cooperation, scientific programmes were, for the most part, arranged in the form of symposia upon selected subjects, instead of, as hitherto, leaving the subjects of discussion wholly to the choice of individual authors. A certain number of subjects considered to be most important were chosen by the organisers of the Congress, and prospective authors were<sup>52)</sup> asked to contribute their papers upon one or more of these subjects.

In May, 1925, the work of organisation made a sufficient [7] advance and H.I.H. Prince Kotohito of Kan-in graciously accepted the Patronship of the Congress, whilst nominations of Honorary President, Honorary Vice-Presidents and Executive Officers had been made and accepted. Invitations to participants in the Congress were then issued to all the Pacific and other interested countries, official invitations from government to government being sent through the diplomatic<sup>53)</sup> channels and less formal invitations being sent directly from our National Research Council to some one representative scientific organisation in each of the countries where such organisation was known to exist, and asking that organisation to extend the invitation to other suitable organisations in the respective country. Each invitation was accompanied with a Preliminary Announcement, giving, among other things, the organisation and preliminary programmes of the Congress. When, in July, 1926, the work of organisation was completed and a detailed programme of excursions worked out, a Second Announcement was issued. The following table gives the number of the governments and scientific institutions of the countries represented at the Congress and the number of the delegates and other members from each of the participating countries<sup>54)</sup> : —

[8]

| Countries Represented    | Number of Governments | Number of Scientific Institutions | Number of Delegates and other Members |
|--------------------------|-----------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|
| United States of America | 1                     | 50                                | 56                                    |
| Australia                | 1                     | 2                                 | 32                                    |
| Canada                   | 1                     | 6                                 | 8                                     |
| Chilie                   | 1                     | —                                 | 1                                     |
| China                    | 2                     | 14                                | 18                                    |
| France                   | 1                     | 4                                 | 8                                     |
| Great Britain            | 1                     | 1                                 | 5                                     |
| Hawaii                   | 1                     | 3                                 | 12                                    |

|                                                |    |     |     |
|------------------------------------------------|----|-----|-----|
| Hong Kong                                      | 1  | —   | (1) |
| Indo-China                                     | 1  | —   | (1) |
| Macao                                          | 1  | —   | 2   |
| Netherlands                                    | 1  | 1   | 3   |
| Netherlands East Indies                        | 1  | 6   | 14  |
| New Caledonia                                  | 1  | —   | (1) |
| New Zealand                                    | 1  | 4   | 7   |
| Peru                                           | 1  | —   | 1   |
| Philipine Islands                              | 1  | 4   | 11  |
| Straits Settlements and Federated Malay States | 2  | 1   | 5   |
| Tahiti                                         | 1  | —   | (1) |
| Union of Soviet Socialist Republics            | —  | 10  | 10  |
| (Sweden)                                       | —  | —   | 1   |
| Total                                          | 21 | 106 | 194 |

Countries invited but not represented were<sup>55)</sup> : — Bolivia, Columbia, Costa Rica, Ecuador, Guatemala, Honduras, Mexico, Nicaragua, Panama, Salvador, and Siam.

The number of countries participating in the First Congress held in Honolulu was 6, not counting Hawaii and the United States, and the number of scientists attending that Congress from these six countries was, as already stated, about 20, whilst at the Second Congress held in Australia 14 governments and 67 scientific organisations from overseas were represented, the number of the delegates [9] of these governments and scientific organisations and other overseas members being about 100. The numbers in the proceeding table far exceed those just cited, and we were further much gratified and that a very large number of the overseas delegates to the Third Congress were men of the first rank in the various departments of science. As to the home members, their number, in spite of great restrictions that were laid upon their qualification, was more than 400, so that the total membership of the Congress somewhat exceeded 600.

The Inaugural Meeting of the Congress was held on 30th October, 1926, in the Great Hall of Tokyo Imperial University, when H.I.H. Prince Kotohito, Patron of the Congress, graced the meeting by his presence and delivered the Opening Address, which was followed by the addresses of the Honorary President, the President, and the delegated of the United States of America, Chile, China, France, Great Britain, Macao, Netherlands, Peru and the Soviet Republics. It was a brilliant gathering and an impressive scene, the Hall with about 2,000 seats being nearly full, whilst on the platform His Imperial Highness was supported,<sup>56)</sup> on his right,<sup>57)</sup> by the Diplomatic Representatives<sup>58)</sup> of the participating countries and representative Overseas Delegates<sup>59)</sup> and,<sup>60)</sup> on his left,<sup>61)</sup> by the Ministers<sup>62)</sup> of States and other dignitaries.

The scientific session of the Congress extended from 1st to 11th November, meeting in the rooms of the Imperial Diet Building every day, except Saturday and Sunday. During this period, the Division of Physical Sciences and the Division of Biological Sciences each held five

meetings for the reading and discussion of papers [10] bearing upon their respective subjects, and two Joint Divisional Meetings were held to deal with subjects covering both Divisions. The scientists of various countries and of various specialities<sup>63)</sup> were thus afforded<sup>64)</sup> abundant opportunities of mutually coming in close personal contact from day to day and of thus becoming intimately<sup>65)</sup> acquainted with one another, — a condition which is most important for any effective cooperation. It was a great satisfaction to us that the policy of organization adopted for the Third Congress was generally approved and appreciated by the foreign delegates, and it cannot be doubted that the success<sup>66)</sup> of the Congress was in part, at least, due to this policy. Sectional Meetings were also held, the number of which varied from one to four, according to the Sections. The number of papers presented at these meetings of the Congress reached about 450. Of these, those relating to the Oceanography of the Pacific naturally headed the list, this subject being studied from the physical and chemical, the biological, and the fisheries points of view.

The Final General Meeting was held on 11th November, when a number of important resolutions were adopted, one of which referred to the formation of an International Committee on Oceanography of the Pacific with the view of studying this important subject more systematically. This and other international committees also formed by the resolutions adopted at the Final General Meeting will present their reports at the next Congress, which was decided to be held<sup>67)</sup> in Java in 1929, accepting the invitation of the Netherlands Indies [11] Government. Another important resolution was the adoption of the Statutes and By-Laws of Pacific Science Association, the drafts of which were prepared by the International Organisation Committee formed at the Second Congress, as already noted. Pacific Science Association is the name given to the newly created permanent body, which has for its objects (1) the promotion of cooperative study of<sup>68)</sup> scientific problems of the Pacific and (2) the promotion of friendly relations among the Pacific and other interested nations, and which holds Pacific Science Congress (hitherto called Pan-Pacific Science Congresses) as a means of attaining its objects. The permanency of these Congresses is thus assured.

It may be observed that the policy of organisation adopted for the Third Congress was in agreement with the Articles of the By-Laws of Pacific Science Association and that that Congress was, in other ways also, wholly conducted in accordance with the same By-Laws. The adoption of the Statutes and By-Laws of Pacific Science Association implies, therefore, that the Third Congress was the model<sup>69)</sup> for future Pacific Science Congresses.

The excursions formed an important feature of the Congress. In making the necessary arrangement, very minute attention was paid to all the details, and scientific guide-books relating to each excursion (about twenty<sup>70)</sup> in all) were carefully prepared, sending a number of scientists to the various localities to collect all the necessary material. The excursions extended from the Ainu villages in Hokkaido in the north to the Sakurajima volcano in Kyusyu in the [12] south, during which abundant opportunities were afforded foreign scientists of visiting those places which, apart from their scientific interest, are either superb in scenic beauty or rich in works of ancient art and historical traditions, and at the same time of observing life in those

remote regions where ordinary tourists rarely, if ever, leave their foot-prints. Among other things, the unfailing courtesy and kindness of our people and the general diffusion of elementary education even in the remotest parts were the two which gave these visitors a most favourable impression, the smiling faces of school children whom they met wherever they went adding greatly to this impression. It is a source of much gratification to think that all the visitors left Japan with an uncomparably<sup>71)</sup> richer and truer knowledge of our country and people than they had before and that this fact must greatly contribute to the promotion of mutual understanding and goodwill.

The graciousness with which His majesty was pleased to entertain foreign visitors at Tea<sup>72)</sup> at the Kasumigaseki Detached<sup>73)</sup> Palace and again at the Chrysanthemum Party<sup>74)</sup> at the Akasaka Detached<sup>75)</sup> Palace was a rare honour which was highly appreciated by them all. In addition to these Imperial favours, the foreign visitors were entertained at a Garden Party by H.I.H. Prince Kotohito, Patron of the Congress, at a Dinner by H.E.<sup>76)</sup> The Prime<sup>77)</sup> Minister, Honorary President of the Congress, and at a [13] large number of various other social functions both during the session and during the excursions, all of which were greatly appreciated by them, and I recall with a feeling of much gratitude that these entertainments greatly added to the success<sup>78)</sup> of the Congress. On our own part, we were pleased to be able to extend hospitalities to all the foreign visitors to the extent of entertaining them as our guests during the whole of the session and the excursions before and after it.

I beg to be permitted to add a word more in conclusion. Western sciences were systematically introduced into this country only a little over half a century ago, but have made such a wonderfully rapid progress that, as a scientific nation, Japan does not now fall behind many of the nations of the world, a fact which, before the Congress, was not quite recognised in other countries.<sup>79)</sup> The Congress, however, at which a large number of valuable papers were presented by our own scientists and during which foreign scientists had an abundant opportunity of witnessing with their own eyes the great activities with which our Universities and various other research institutions are engaged in scientific work, gave an opportunity for them of clearly recognising this wonderfully rapid progress. At the same time, the Congress was a great stimulus to science in this country, and I feel sure that scientific studies will, in future, be pursued with an enhanced activity in Japan.

#### 文献と注

- 1) 例えば、同書第1巻(通史1)～第3巻(通史3)や文部省(1972)『学制百年史』pp.636-640を参照。
- 2) 英文縮約版では、およそ同様の事項が記載されているが、和文9頁での要報発送の説明について、相当する英文7頁のほうが、やや詳細であり、日本政府から外国政府への公式の招待状、学術研究会議から各国学術機関への準公式の招待状、それに伴う外国における関連機関への展開依頼を行ったことが述べられている。
- 3) 旧漢字は基本的に新漢字で表記した。〔1〕〔2〕は、御進講本文中のページ。難読と思われる漢字については、筆者がルビを付した。
- 4) 実際の日数は13日間である。
- 5) 原稿のかな表記はすべて清音となっているが、10月31日は休会のため会議は12日間である。
- 6) 「嶼」手書き。

- 7) 原文ママ。
- 8) 同上。
- 9) 「忽」手書き。
- 10) 「は」を手書きで「が」に訂正。
- 11) 「即」手書き。以降、「即」はすべて手書き。
- 12) 「郭」手書き。
- 13) 「斉」手書き。
- 14) 「る」手書き。
- 15) 「る」手書き。
- 16) 「懇」手書き。
- 17) 蹉跌=失敗、行き詰まりのこと。
- 18) 「を」から「の」に手書き訂正。
- 19) 「米合衆」手書き。
- 20) 「峽」手書き。
- 21) 「麓」手書き。
- 22) 「つ」から「り」に手書き訂正。
- 23) 「淳」手書き。
- 24) 「如き」手書き。
- 25) 「苑」手書き。
- 26) 「方面」手書き。
- 27) 「渥」から「遇」に手書き訂正。
- 28) 準備委員については、学術研究会議 (1925)『学術研究会議録』に 66 名の委員と 4 名の事務嘱託が記されている。
- 29) 見学旅行の詳細は、例えば次の出版物に記されている。National Research Council of Japan (1928) *Proceedings of the Third Pan-Pacific Science Congress : Tokyo, October 30th-November 11th, 1926*
- 30) 山中千尋 (2012) 「櫻井錠二と日本近代における学術振興の展開」『科学史研究』第 II 期 Vol. 51 No.263, 138-147; 山中千尋 (2016) 「日本学術振興会の設立経緯にみる学術支援体制の形成：櫻井錠二による御進講『学術研究ノ振興』(1931)」『科学史研究』第 III 期 Vol. 55, No. 277, 35-50.
- 31) 櫻井錠二 (1919) 「連合学士院代表者の会議に関する報告」『鉄と鋼』Vol.5, No.7, 75-83.
- 32) 櫻井錠二 (1926) 「本邦科学の国際化」『東洋学芸雑誌』Vol. 42, No.8, 1-3.
- 33) 櫻井錠二 (1940) 『思出の数数』九和会 . p. 37.
- 34) 表紙は 1 頁目の冒頭のタイトルと同じため省略した。
- 35) タイプ“a”が手書きで“A”に修正されている。
- 36) エクアドルの首都。
- 37) 原文ママ。通常は Arctic Circle と表記。
- 38) 原文ママ。通常は Antarctic Circle と表記。
- 39) 原文ママ。通常は Mediterranean と表記。
- 40) タイプ“o”が手書きで“p”に修正されている。
- 41) 3 つめのタイプ“a” (phenomena) が手書きで“e”に修正されている。
- 42) 2 つめのタイプ“e” (be) が手書きで“y”に修正されている。
- 43) 4 つめのタイプ“e” (sucess) が手書きで“c”に修正されている。
- 44) 原文ママ。通常は時制の一致で would が使われる。
- 45) namely (すなわち) の意味。
- 46) タイプ“large”に手書きで最後の“r”が付け足されている。
- 47) Chairman の前のタイプ“the”が手書きで消されている。
- 48) タイプ“greatest moment”が手書きで“gravest questions”(重大な問題)に修正されている。
- 49) 4 つめ、5 つめのタイプ“ir(preirous)”が手書きで vi に修正されている。
- 50) 原文ママ。

- 51) 複数形の“s”が手書きで挿入されている。
- 52) この後の“to be”が消されている。
- 53) “diplomatic”のことと考えられる。
- 54) “countries”であろう。
- 55) タイプ“ere”が手書きで were に修正されている。
- 56) 手書きでカンマが打たれている。
- 57) 同上。
- 58) タイプ“Repusentative”下線部が、手書きで“re”に修正されている。
- 59) タイプ“Delegated”下線部が手書きで“s”に修正されている。
- 60) 手書きでカンマが打たれている。
- 61) 同上。
- 62) タイプ“Munisters”下線部が手書きで“i”に修正されている。
- 63) 正しくは“specialties”である。(原文は、lの後にiがついている)
- 64) タイプ“apporded”下線部が手書きで“ff”に修正されている。
- 65) “intinately”下線部が手書きで“m”に修正されている。
- 66) 4つめのタイプ“e”(suecess)が手書きで“c”に修正されている。
- 67) “was decided to hold”の意味。
- 68) ここのタイプ“the”が手書き二重線で訂正されている。
- 69) “model”のことと考えられる。
- 70) タイプ“twently”下線部が手書きで消されている。
- 71) タイプ“uncomparatly”下線部が手書きで“b”に修正されている。「比較できないほどに」の意味。
- 72) タイプ“tea”下線部が手書きで“T”に修正されている。
- 73) “detached”であり、全体で霞ヶ関離宮のこと(1904-45)。
- 74) 観菊会のことか。
- 75) “detached”の間違い。
- 76) His Excellency の省略。
- 77) タイプ“Prince”下線部が手書きで“m”に修正されている。
- 78) 4つめのタイプ“e”(suecess)が手書きで“c”に修正されている。3つめ“c”も手書きでなぞった跡がある。
- 79) このあとのタイプ“—”(ダッシュ記号)が手書きで削除されている。